

## 高鷲大鷲白山神社の懸仏について —修験道と懸仏の歴史—

高鷲大鷲白山神社の懸仏は、「会報高鷲の文化財第14号」と「同第35号」で紹介したが、高鷲の懸仏が郡上の中で古いものであることを検証しようと思い、ここに会員の皆さんに紹介する。

### 修験道

修験道とは、古代日本において山岳信仰に仏教(密教)や道教等の要素が混ざりながら成立した日本独自の宗教・信仰形態である。山へ籠もりながら厳しい修行をして悟りを得ることを目的とする。修験道の実践者を修験者または山伏という。

修験道は、森羅万象に命や神霊が宿るとして神奈備や磐座を信仰の対象とした古神道に、それらを包括する山岳信仰と仏教が集合し、密教などの要素も加味されて確立した。日本各地の霊山を修行の場とし、深山幽谷に分け入り厳しい修行を行うことによって功德のしるしである「験力」を得て、衆生の救済を目指す実践的な宗教である。その山岳信仰の対象であったのが奈良県の大峰山、石川県の白山等日本各地に霊場や霊山がある。

修験道の歴史は、飛鳥時代の役小角が創始とされるが、彼は伝説的な人物なので開祖に関する史実は不詳である。平安時代になると修験道は盛んに信仰されるようになり、古神道と仏教の信仰とを融合させる神仏混淆(神仏習合)の動きの中に求められる。神仏混淆は徐々に広まり、神社の境内に別当寺が、寺院の境内に「鎮守」として守護神の社がそれぞれ建てられ、神職、或いは僧職が神前で読経を行うなどした。そして、それらの神仏混淆の動きと、仏教の一派である密教(天台宗・真言宗)で行われていた山中での修行とさらに日本古来の山岳宗教と結びついて、修験道という独自の信仰が成立していった。このように修験道は奈良(南都)仏教との距離もあって、密教との関わりが深くなったため、修験道法度貳を定めることで仏教の一派と見なして統制した。こうして鎌倉時代後期から南北朝時代には独自の立場を確立した。

それ以後、修験道界は本山派(天台系)と当山派(真言系)に大きく二分され、並び称されるようになったが、いち早く室町時代に地方の修験を掌握し、全国的に勢力を確立したのは本山派だった。その本山派を支配したのは聖護院であった。後に江戸幕府は、慶長18(1613)年に修験道法度を定め、真言宗系の当山派と、天台宗系の本山派のどちらかに属さねばならないこととし、両派を競合させた。本山派は聖護院を本山とし、当山派は真言宗総本山醍醐寺塔頭の三宝院を本山とするようになった。

明治元(1868)年の神仏分離令に続き、明治5年に修験禁止令が出され、修験道は禁止された。また廃仏毀釈により修験道の信仰に関するものは破壊された。修験系の団体の中には、仏教色を薄めて教派神道となったものもある。



熊野の深山で修行中の修験者

この地方の主な修験道霊山と社寺は次の通りである。

- |                         |                         |
|-------------------------|-------------------------|
| 御岳山                     | 王滝御岳神社                  |
| 白山                      | 旧加賀国白山寺白山本宮(神仏分離令で廃寺)   |
|                         | 旧越前国霊応山平泉寺(神仏分離令で廃寺)    |
|                         | 旧美濃国白山中宮長滝寺(現在は天台宗の長瀧寺) |
| 立山                      | 旧加賀藩芦峯寺(神仏分離令で廃寺)       |
| 戸隠山、石動山、富士山、秋葉山、伊吹山、三井寺 | 等々                      |

## 懸仏

懸仏は、銅板に仏や神の像を刻んだり貼り付けた器物である。御正体とも呼ばれる。神仏習合の思想に基づいて制作され、神社や寺院に奉納される。

平安時代中期頃から銅鏡の鏡面に仏の姿を毛彫し、線刻した鏡像が制作されるようになる。鏡像は次第に華美となり、立体的な仏像を鏡面に彫刻ないし添付することが増加した。懸仏は、神仏習合の修験道の盛んになる10世紀頃から制作された。初期のものは金峰山に出土するものが多い。像は線刻の素朴なものから浮き彫りへ発展したもので、後期になるほど大型で装飾や持ち物が複雑になる。江戸期には大量生産が行われ粗雑になってくる。

みしようたい

きょうぞう



阿弥陀如来の毛彫りがある懸仏

## 高鷲大鷲白山神社の懸仏

高鷲の白山神社に所蔵される懸仏48面は、もと高鷲向鷲見にあり見事な杉の社叢をもった向鷲見白山神社の所蔵であったが、明治41年に行われた神社合併によって、高鷲白山神社に移管された。その懸仏の中で毛彫で尊像をあらわしたものが写真である。制作年代は裏書の墨書から鎌倉時代初期であり、郡上市の中で最も古い物である。

## 和良法師丸白山神社の懸仏

和良法師丸白山神社には二面の懸仏があり、写真は阿弥陀仏の懸仏面である。阿弥陀如来の座像が毛彫りで記されている。結跏趺坐・上品上生印を結び二段の光背がある。鎌倉時代の作とおもわれる。円の直径は21.5 cm、像の大きさは13.5 cmで、金銅製である。



法師丸白山神社の阿弥陀如来懸仏

## 美並星宮神社の懸仏

円鏡板銀メッキ、御正体は鑄銅メッキ。左手に水瓶を持ち、右手は膝上で与願印を示す。台座の蓮弁は金銅板金で鱗葺き、縁に桜洛(ヨウラク)を付ける。天蓋・光背・桜洛付き。左右に蓮華を挿した水瓶を置く。頑丈な獅子噛みは色彩されている。裏板に「十一面かん御座付」「少二中」の墨書があることから鎌倉時代の十一面観音菩薩の懸仏だと考えられる。



美並星宮神社の十一面観音菩薩懸仏

(参考文献)①ウイキペディア ②高鷲の文化財 ③和良村の文化財  
④美並村の文化財第1集